

北海道原水協 F A X ニュース

原水爆禁止北海道協議会 エメール hokkaidogensuikyo@pearl.ocn.ne.jp
電話011 (747) 7557 fax011 (747) 7537 2018年11月15日

私たちが、禁止条約に参加する政府をつくらう

ちひろカレンダー被災地贈呈キャンペーン

北海道原水協は、胆振東部地震（9月6日）で震度7の震源地厚真町を15日に訪問しました。前日の夜に震度4の余震、現地では「またか！」と緊張感が走ったそうです。

最初に宮坂尚市郎町長（写真・右から二人目）を訪問。町長は午後からの天皇訪問を控えすべての予定をキャンセルしたと言いながら、「地震からまだ2か月余り。色々なものが必要、カレンダーも必要です。温かい感じがしていいですね。町民からいろいろな話を聞いていって下さい」と訪問を歓迎しました。

山肌を赤黒く200㍍以上土石流が走っていった！”平成最後の最大の災害”に役場職員100人がてんやわんや、日常のつながりやコミュニティを生かしての奮闘が町長の口から生々しく語られました。今年初めて国民平和行進が訪問したことを、ご縁がなくて申し訳なかったと言われてしまい、逆に恐縮してしまいました。

「ヒバクシャ国際署名」にすでにサインしている町長は昨年の核兵器禁止条約採択にも触れ、平和を地球規模でとらえなくてはと。最後に「町として、日常生活の再建、地域の振興、農業の再生を町民一人ひとりに示していきたい」と語りました。

11月に完成した役場前の仮設住宅を訪問しました。『厳しい冬を前に一日も早く皆さんが元の生活に戻れることを願って、私たちは全国から寄せられた募金で、あなたのお部屋に愛と平和のちひろカレンダーをお届けします』と一人ひとりに手渡しました。



最初に訪問した84歳の女性（写真左）は、「ほー、嬉しいね。ちひろは大好き」と、突然の訪問にもかかわらず満面の笑顔で受け取ってくれました。「被災した家はいつ壊れるかわからない。仮設は狭くてねえ。冷蔵庫とかテレビとか仮設に入るように小さいものを買ってそろえたよ」と。

ちひろカレンダーを手にした74歳の男性（写真右）は、「昨夜の震度4は本当にびっくりした。女房と二人で入っているからまだ安心だけど。仮設は2年だけ。家を修理したいけれど、調査がまだなのでどうしていいのかわからない。仮設に入っている人に将来設計示してほしい」

「いいところに入れてもらった」と話す女性は、12月21日までに家を解体するそうです。「戸棚やたんすなど全部倒れてしまった。荷物どこにどうしようか」と悩みを話してくれました。一番被害が大きかった吉野地区から入居した女性は、「まだまだ家の中が全然片付いていなくて」と話しながら、カレンダーを受け取りました。

「せっかくだから家の中、見ていくかい」と住居の中に入れてくれた男性は、「（カレンダーもらえるのは）良かった。助かります。最初のころは曜日もわからなかった。復興に力を貸してくれるのは嬉しい」と。

北海道原水協代表理事の石岡伸子さん（新日本婦人の会北海道本部）・宮内聡さん（日本共産党北海道委員会）、事務局長の嶋田千津子、現地から昨年の世界大会北海道代表団団長の伊藤富士夫さん（日本共産党厚真町議）が参加しました。

